

# 58期リレーエッセイ

## 登録後 1 年を振り返って

会員  
岡渕 貴幸



### はじめに

このエッセイをお読みいただく頃には、「早いもので今年も残すところあと1ヶ月を切りました」…そんな言葉があちこちで聞かれるようになってきていると思うが、私がこの原稿を書いているのは弁護士登録をしてからちょうど1年が経った10月である。そこで、この1年間を振り返っての雑感をとりとめもなく書いてみようと思う。

### 厳しい世界

司法試験の受験生時代、その後の修習生時代と、それなりの期間、法律の勉強をしてきたつもりだった。しかし、たったこの1年の間に、初めて見る法律や今まで名前すら知らなかった法律に数多く触れた。日々の法改正や新判例のフォロー、各専門分野における専門的知識の補充等、まさに弁護士は日々勉強し、自己研鑽を積んでいかなければならないということ、この1年間で改めて痛感した（実践できているかは別として…）。

気付いたら弁護士2年目に突入していた。最近、59期の複数の友人から、1年経って自分で成長したと思うかという質問を何度か受けたことがあり、そのことについて同期同士で話す機会があったが、皆自信を持って「YES」とは答えられないと話していた。私も全く同感である。

### やり甲斐を感じた瞬間

しかし、たった1年ではあるが、様々な人と出会い、様々な経験をすることができた。私が担当した事件の中で最も強く印象に残っているのは、やはり初めての国選事件だった。最初から最後まで全てを自分ひとりの責任で行なわなければならない、という不安感でいっぱいだったことを今でも覚えている。

事案は21歳の被告人の覚せい剤取締法違反事件（初犯）であり、特に難しい事情があるわけでもなく、事案

としては極めて単純なものであった。私は、この事件は究極的にはコミュニケーション不足からくる親子間のすれ違いがその動機に大きく影響していると考え、被告人の真の更生及び再犯防止のためにも、親子間のコミュニケーションの架け橋になるように努めた。その結果（…と信じたいが）、双方が今まで抱いていた誤解や過去のわだかまりが解け、被告人は法廷で両親に対し涙を流しながら謝罪した。これを見て私も胸の中で熱くなるものを覚えた。執行猶予付判決が下された後、裁判所の1階での別れ際、被告人の母親が被告人に「最後に先生と握手しなさい」と言った。照れる被告人と握手したとき、言葉では言い表せない充実感を感じた。

### “仲間”の存在

私の事務所には、私を含め同期が3人いる。やはり同期とは特別な存在であり、とても心強く思っている。その他にも研修所の同じクラス、福岡での実務修習時代の同じ班、大学の同期や、期や事務所は異なる昔からの友人、そして事務所の先輩等々、たくさんの人に迷惑を掛けながら、たくさんの人に支えられながら、あっという間に1年が経ってしまったというのが正直な実感である。日々自分の無力さを痛感しながらも、素晴らしい“仲間”の存在に感謝している。

### まだまだこれから

久しぶりに地方で弁護士をやっている同期と話をすると、彼らはプライベートの時間も充実させることを決して怠っていないことに気付かされる。私も彼らに負けぬよう、趣味である野球やサックスを続け、人生を楽しむことを決して忘れることなく2年目以降も精進していこうと、この原稿を書きながら改めて思った。

…ちょっと真面目に書きすぎたかな!?

\*次号からは「59期リレーエッセイ」を掲載します。